



denki

地平線から地平線へ
送電線から送電線
想像も出来ないような
膨大な電気が、地球上では流れている。

「denki」とは
何なのでしょう。
基本的に雷以外では、見る機会はほとんど無いと思います。
触れる機会も、静電気くらいしか思いつきません。
なかなか、見たり、触れる事が無いものが
言い換えれば、ちょっと得たいの知れないものが
私たちの生活を、支えているというのは
ちょっと、不気味ではないですか。

ピアノ

「スピーカー」より
ピアノの音色が、（緩やかな感覚で）聞こえてきます。

それを聞いても、あまり、
「人が弾いている」と思うひとは、いないですね。
ピアノのある家は、別かも知れませんが、
いわゆる「ふつう」は
スピーカーやらアンプやら、コンポやら、
CDプレイヤーといった、家電から、音楽が再生されて、
ピアノの音が、聞こえているな、そう感じる方が大半でしょう。

私の家も、いわゆる「ふつう」の家なので
音楽は別に誰かが演奏しているわけでは無く、
そのまま、プレステ3に接続したスピーカーから流れている、
そういったものなのです。

まあ、電気が作り出した音を聞いている、ということにはなります。
詳しい仕組みは、そっちのオタクじゃないので、分かりませんがね。

．．．

スピーカーから、ピアノの音が聞こえてくる。

私はナルシストであるが故に、音楽を聴きながら詩を書くという行為を
あたかもカッコイイ事をしているように思ってしまうので

またいつもの如くキーボードに手を置き、

「これでコーヒーでもあったら最高だがコーヒーをいれるのが面倒だな、」

「ビールを飲む気分では無いな、今日はそんな気分でもない．．．。」

「誰も聞きたくないようなそんな事を書くのは、最高の私の贅沢だな．．．。」

どうでもいい空間に、どうでもいい時間。

パソコンに向かい、気の向くままにマウスとキーボードを操作。

そばに

そっと

寄り添うように

やんわりと、音が聞こえる。

人では無いものが作り出した、

ひとのこえ。

楽器のおと。しずかにゆるやかに、

とうとうと、僕に聴かせてくれるためだけの、ひとつの音楽。

歌詞は、素敵な歌詞だ．．．。

本当にコーヒーが欲しくなってくる。

この瞬間だけ、うちの部屋を喫茶店にしてみたい。

この部屋に響く、優しい歌は

僕のこころと一緒に、ゆるやかなリズムでいる。

静かに静かに、いのちの、

ほんのひとときを、一緒に過ごしている。

ああ．．．。

でんきが作り出す、架空の「ひとのこえ」

見たことも、触れたこともない、うたいての

こころ、きもち、いのちを
僕に届ける、非現実の歌い手よ・・・。

1000円くらいの、安いイスに
背もたれに、ゆっくりともたれながら
パソコンのキーをしょっちゅう打つ、僕に
あなたは、音楽を、届けてくれるのですか・・・。

とても、不思議な事ですね。
そこには、誰もいないで、自分ひとりでいられるのに、
僕だけの世界の、ドアを少しだけ開けて
僕だけの世界に、音楽を流してくれた。

孤独とは、私のちょっとした楽しみです。
本当はそこに誰もいない筈なのに、
誰かの存在だけ、感じさせるからです・・・。
ああ、私は、誰かと一緒にいるんだ。
誰かと一緒にいるのに、
そこにはいないだけなんだ。

静かの部屋に、うただけ残して、
それを作った人はいま、別のところにいるんだ・・・。

私以外は、誰もいないこの部屋で
会った事も無いひとを、感じている。

ああ、私は、
孤独であるのに、孤独じゃないなんて。

でんき

<http://p.booklog.jp/book/26897>

著者：せいうんですよ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/seiundesuyo/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/26897>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/26897>